
ボーカロイドの休日

Mark-V

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボーカロイドの休日

【Nコード】

N2144E

【作者名】

Mark - V

【あらすじ】

クリスマスも近づいた十二月のある日、沢渡夏樹は街角で偶然、話題のアンドロイドシンガー初音ミクと出会った。出会ったばかりの夏樹に彼女が告げた言葉は「帰りたくない」。どうやら彼女には悩みがあるらしいのだが……。オーソドックスなアイドルもの。

（前書き）

この作品のモデルとなっている「キャラクター・ボーカル・シリーズ」はクリプトン・フューチャー・メディア株式会社様の製品です。ボーカーロイド等、一部の固有名詞も作者オリジナルのものではありません。ですが、作品中に登場する設定の一部は作者オリジナルのもので、クリプトン・フューチャー・メディア株式会社様の、いわゆる”公式設定”ではありません。

上記をご認識の上、お楽しみいただければ幸いです。

著作権や公式設定に関する詳細は、クリプトン・フューチャー・メディア株式会社様のWEBサイトをご覧ください。

クリスマスも近づいた、ある日のこと。オレは自覚もなのまま運命の分岐点に立ち、”未来”を選択することになった。

「夏樹い、お前この後どうする？ オレたちはカラオケいくけど」

友人たちとファーストフードで遅めの昼食をすませ、全員一緒に店から出たところで、隣に立っていた一人が唐突にそう言った。どうやらオレがトイレにいつている間に満場一致で決まったらしい。

「んー、オレはやめとく。ていうか、名前で呼ぶな」

答えるついでに、名前のことで釘を刺しておく。なにも夏樹って名前が嫌いなわけではない。音の響きが女っぽいから、そう呼ばれると単純に照れくさいのだ。些細なことだが気になるものは気になるので、友人たちには常日頃から苗字で呼ぶように言っている。

「はいはい、わかってるって。んじゃーな、沢渡くん」

絶対わかってないだろ、あいつ……わざとだ、わざと。

遠ざかっていく友人たちの背中に小さなため息を投げてから、オレはクリスマスの装飾が目立ち始めた街を駅に向かって歩いていく。

ふと気になって携帯電話の時計を確認すると、あと一時間もすれば日が落ちようかという時刻だった。どうりで寒いわけだ。オレは歩きながらコートのポケットに手を突っ込み、少しだけ首をすくめる。急ぎの用事があるわけでもないのに、あまり急がずに十二月の街を楽しむことにした。毎年この時期になると、大通り沿いにあるショップのウィンドウはもちろん、街灯や街路樹まで綺麗に飾られて、街中がずいぶん華やかになる。その様子を眺めながら歩くだけでもけっこう楽しい。……いや、そもそもオレにできるのは眺めて楽しむことだけなのだけれど。彼女いないしなあ。

そんなふうになんか掘り出したことを考えながら、大きなショッピングビルの前を通り過ぎようとした時　突然、頭上から歌声が降ってきた。

思わず立ち止まり、ショッピングビルの壁にある大型街頭ビジョンを見上げる。すると、そこには見覚えのある少女の姿が大きく映っていた。

ああ、この子の曲だったのか。

ビジョンに映されているのは、発売された新曲のプロモーション映像のようだった。平均身長ほぼぴったりの少女の身体が、歌とリズムに合わせて弾けるように躍動している。その顔たちはとても愛らしく、肌も雪のように白くて滑らか、ちょっと細身だがスタイルだつて悪くない。シンセサイザーを思わせる黒を基調とした衣装がよく似合っていて、もちろん歌やダンスにも人を惹きつける輝きがあった。

だが、もっとも注目すべきなのは、頭の両側でびよこびよこ揺れ

ているツインテールの髪や、スポットライトの光を反射する大きな瞳だろう。彼女の髪と瞳は、少なくとも地球人類にはありえない、鮮やかな緑色だった。以前、雑誌で読んだ記事によると、人間との区別がつくように開発チームがわざわざそういう色をつけたそうだ。

そう、彼女は人間ではない。各分野の国内研究機関が技術協力のもとに作り上げた科学の結晶、ボーカー・アンドロイドなのだ。

ボーカー・アンドロイド 通称<ボーカーロイド>である彼女には、開発コード以外にも『初音ミク』なんてパーソナルネームがきちんと与えられている。史上初のアンドロイドシンガー、初音ミク。彼女を言い表すには、この言葉が一番手っ取り早い。

現在、初音ミクはアイドル歌手として日本国内限定で芸能活動をしている。活動が国内に限られているのは、彼女が最先端技術の塊であるからに他ならない。破格の高速演算を可能とする<QC-CPU>や、人間特有の”発想”や”閃き”さえ高レベルで再現する<VN-OS>など、彼女に使われている技術の中には輸出規制されているものがけっこうある。

そういった最先端技術が軍事でも宇宙開発の分野でもなく<ボーカーロイド>という特殊な形で結実したのは、コミックとアニメの国である日本ならではのと言える。たぶん日本人以外には理解できない発想……いや、日本人でさえ最初は首を傾げたのだ。

開発計画の発足当時、プロジェクトチームは国の内外から一斉に失笑と批判を浴びせられた。

科学がどこまで進歩したのかを一般の人々にも知ってもらうため、現代の最先端技術を結集して一つのものを作り上げる そんなコ

ンセプトにより立ち上がった一大プロジェクトの責任者たちが、いきなり「アンドロイドシンガーを作ります」なんて言い出せば、批判を受けるのも当然のことだ。はつきり言って、その時点でプロジェクトそのものが潰されてもおかしくない。

しかし、アンドロイドシンガーという一般人にもわかりやすい売り文句のおかげでプロジェクトには多大な関心と資金が集まり、紆余曲折を経ながらも「ボーカロイド」の開発は無事に成功、結果的に日本の技術力は世界を大きく引き離すことになったのだから、世の中わからないものである。

やがて大型ビジョンの映像が初音ミクのプロモーションから別のものに切り替わったので、オレは聴いたばかりの新曲を頭の中で反芻しながら、また歩き始めた。

うん、あの曲ならCDを買ってもいいなあ。彼女が稼いだお金は、彼女自身のメンテナンスやさらなる技術開発、慈善事業などに使われるそうだから、彼女のCDを買えば日本のためにもなるわけだ。悪くないお金の使い道である。

ショッピングビルの前から離れてしばらく歩くと、右手に細い路地が見えてきた。知っているやつは少ないが、その路地を通ると混雑する大通りを避けて駅までいける。初音ミクの歌を頭で繰り返し返すのに夢中だったオレは、ほとんど上の空で、いつものように角を曲がり……

「ぶくつ？」

そんな声が胸もとから聞こえたと同時に、身体に軽い衝撃が伝わる。

まずいと思った時にはもう手遅れで、オレにぶつかってきた小柄な人影は見事なまでに吹っ飛んでいた。ぶつかるだけで済まなかったのは、きっとオレが無意識に踏ん張ってしまったから。

ああ、せめてオレだけが悪いんじゃないと思いたい。

「あ、う……？ いた、た」

相手はアスファルトの上にぺたりと尻餅をつき、小さな呻き声を上げている。上着についたフードをすっぽりとかぶっているので顔はよくわからないが、スカートをはいているからたぶん女の子だと。うわ、パンツ全開じゃねーか。なんというか、すげえ気まずい。さっさと助け起こそう。

「すみません、大丈夫ですか？」

「え……ああ、いえ、こちらこそすみません。前方不注意で」

フードの奥から答えた声は、予想通り少女のものだった。なかなか冷静な相手らしいので、オレは内心ほっとする。けれど、そのかわりに罪悪感がむくむくと大きくなった。いつそ嫌なやつだったら腹を立てるだけですむのに、なんて、泣き言めいた考えが浮かぶ。

それにしても今の声……なんだかやたらと可愛いらしかったな。いつまでも耳に残るような、ほんのりと甘くて透き通った響き。

彼女は自分の髪をまるごと全部フードの中に押し込んでいて、その

せいで頭がこんもりと膨らみ、とてもアンバランスというか不格好
というか　ぶつちやけた話、妖怪なみに不気味なんだけど、声の
印象からすると、”素顔は美少女”なんてことも十分ありそうだ。

たとえそうだったとしても、オレはぶつかったことを幸運だと思え
るほど素直じゃないし、そこまで恥知らずでもないけれど。

「怪我してませんか？　痛いところとかは？」

「ええと、あの……」痛い”のは久しぶりなもので、ちょっとだけ
……」

念のために確認してみると、彼女は戸惑った声音で返事をしてきた。
……うーん、会話に微妙な食い違いを感じるのはなぜだろう？　な
んとなく、意図は噛み合っていないのに話は通じている、という気
がした。

しかし、そんなことを気にしている場合でもない。ちょっとした気
恥ずかしさを我慢して、オレは彼女の眼前にそっと手を伸ばす。

「ホントすいません。立ってます？」

「あ、はい……ありがとうございます」

彼女は一瞬だけ躊躇ってから、左手でオレの手をつかんだ。そのま
ま、あまつた右手でアスファルトを押しながら、ぐっと身体を持ち
上げようとすする。

ちょうどその時、路地に強いビル風が吹いた。

「きゃ……！」

彼女は短い悲鳴を上げると、風で脱げかけたフードを手で押さえ

ようとしたりするだろうが、右手は身体を支えるため地面についていて、左手はオレの手の中であつたので、どうにもできなかった。フードはあっけなく脱げてしまい、その下に隠されていた彼女の顔があらわになる。

オレは予想外の出来事に身体を硬直させ、同じく呆然としている彼女の顔をまじまじと見つめた。

こちらを見つめ返してくるのは、とても可愛らしい少女だつた。どこかで見たことがある。

もっとも注目すべきなのは、頭の両側でぴよぴよこと揺れているツインテールの髪や、太陽の光を反射する大きな瞳だろう。それが彼女の証だから。

フードの下にあつた彼女の髪と瞳は、少なくとも地球人類にはありえない、鮮やかな緑色で　まさか。

「あなた……初音ミク、か？」

オレがそう尋ねると、彼女はいたずらを見つけた子猫のように肩を縮めた。

「わ、わたし……帰りたくないんです……！」

ビルの合間にある少々薄暗い路地で、潤んだ瞳の上目づかいと、まるでさがるような告白　オレにどうしろっていうんだらうか、この子は。

いや、とりあえず落ち着こう。いくら可愛くても無機物、相手は無機物……あー、医療用の生体部品もけっこう使われているんだっけ。そのあたりを切り口に、プロジェクトが宗教関係者から叩かれたこともあつたはずである。

それはともかく、彼女は帰りたくないらしい。混乱する頭で、言葉通りの意味だけはどうにか理解した。

けれど、突然そんなことを言われても反応に困ってしまう。そもそもオレは、どうしてこんなところにいるのかと彼女に尋ねたのだ。帰りたくない、なんて、まるで答えになっていない

あれ？　まさか今のって……はぐらかされた、のか？

もしそうだとしたら、なんてデタラメな処理能力なんだろうか。ここまで人間らしさを再現できるなんて。ただの学生であるオレにも、その凄さは理解できる。

感嘆のあまり、ため息が漏れそうになった。正直、アンドロイドがここまでのものとは思っていなかったのだ。彼女は、想像していた

よりもずつと”人間”だった。先ほどの「帰りたくない宣言」に目をつぶれば、受け答えからなから不自然なところがまるでない。開発チームが、わざわざ髪や瞳に特徴的な色をつけたのも頷ける。確かに、それでもしなければ人間と区別がつかないだろう。

世界の变革を目の前に突きつけられているかのような気分だった。彼女に使われている技術は、まだコストや耐久性など様々な問題を抱えているそうなので、民間レベルに出回るのはまだまだ先の話になると思っけれど　着実に、世界は変わり始めているのかも知れない。

「あのお……どうかされましたか？」

いつの間にかぼんやりとしていたようで、彼女が反応を探るようにおずおずと声をかけてきた。こういうところも人間らしいなと思いつつ、オレは片手をひらひらと振った。

「ああ、なんでもないなんでもない。ええと、帰りたくないってことは……誰かに見つかるはずなのかな？　だったら、もっと目立たない場所にいかないか」

「ひええっ!？」

オレが尋ねた瞬間、彼女はびくりと震えた。表情を引きつらせ、身体を隠すように自分の両肩を抱き、もの凄い速さでオレから大きく離れる。

おや……？　この不愉快極まりない反応はなんだろう……？

「目立たない場所って　そ、それはつまり人気のないところに連

れ込むとかそういう意味なんでしょうかっ!? あ、ああああ、あの、やめたほうがいいと思いますっ! なんにもできないですよっ! わたしイヤラシイ機能なんてついてませんからー!」

イタズラ目的だと思われていた。この無機物、なんて失礼な勘違いを。

「……まあ、大きなお世話だったってことかもな。それじゃ、オレは帰るから。これからも頑張ってください。応援してます」

「あれ? ええと……はい、ありがとうございます、ます……?」

さり気なく立ち去ろうとするオレを、彼女はきよとんとした表情で見送りかけ その途中でハツとなる。

「わあっ、ままま待ってくださいっ! もしかして早とちりでしたかっ? そうなんですっねっ!? ごめんなさいごめんなさいっ! オトコには気をつけなさいってマネージャーが言ってたからっ!」

あと、応援してますとかそういう見え透いた社交辞令はとっても傷つきますがっ!」

「最後の余計なひと言が心底うるせえよ! そんなの性犯罪者扱いされるよりマシだろ! だいたいな、男だからって全員がイヤラシイとは限らないだろ」

「あのお……わたしのマネージャーはいつも口癖みたいにな、オトコは誰しもが性欲の奴隷なのよ、って言ってますけど……」

「うわっ、むしろそのマネージャーの経歴が気になってきた!! 過去になにがあったんだよ!」

ふと気がつけば、話が妙な方向に転がっていた。決してオレのせいではないと思う。

テレビやプロモーション映像の初音ミクは、もつと神秘性を感じさせるというか、まるで妖精みたいなのに……実物は反応がずいぶんと俗っぽいなあ。技術的には凄いことなんだけど、秒単位でイメージが壊れていくのは遺憾である。

「あう……お願いですから、そんなに怒らないで……」

「ああもう わかった、わかったよ。もう怒ってないから」

必死に言い訳をする彼女がだんだんと可哀想に思えてきて、結局、オレは立ち去るのをやめた。つたないながらも彼女はちゃんと謝ったのだし……それに、世界初のアンドロイドと直接話せる機会なんてそうそうあるものじゃない。この際だから、もう少しだけ付き合ってみようか。

そうやって気持ちを落ち着かせた途端、背後の大通りから視線を感じてオレはぎくりとする。

肩越しに様子を確認すると、何人か、こちらをちらちらと見ているやつがいた。その気持ちはわからなくもない。近くの路地から男女の言い争いが聞こえれば誰だって気になる。

大通りから見ると、アンドロイドの少女はちょうどオレの陰になっているはずだが、それでも、くるぶしまである緑色の髪を完全に隠すのは不可能である。今のところ彼女の存在にはまだ気づかれていないみたいだけれど、長居はできそうになかった。この路地にだっ

て、いつ人がくるかわからない。

「ごめん、ちょっと騒ぎすぎた。そろそろいこう。大丈夫、へんなことなんてしないから。一応、社会に適應できるくらいの理性はあるつもり」

「あ……はい、わかりました。そうですね、いきましよう」

どうにか相互理解が成立したところで、オレたちは小さく頷き合い、歩き出そうとしたのだが。

「!?! おい、フード! フードするの忘れてるっ!」

「えっ!? あ、あわ……!」

なんだか最初の一步からどっと疲れてしまった。

ため息をつくオレの横で、彼女はフードの中に長い髪をぐいぐいと詰め込んでいく。しばらくして髪はどうにか全部フードにおさまったものの、こんもりと頭が膨らんだその姿はやっぱり不気味だった。

もしかして余計に目立つんじゃないのか、これ? そんな思いが一瞬だけ頭をよぎった。しかし、いちいち突っ込んでいてはちっとも状況が進まないの、珍妙な格好についてはとりあえず考えないことにする。

「すみません、準備できましたっ」

「ああ、うん。じゃ、こっちな。この道ってさ、真っ直ぐにいく

と駅なんだけど、途中で曲がれば広い公園に出るんだ。そこなら人目につかない場所もけっこうあるから」

まだちょっとだけびくついている彼女に説明してやりながら、オレは路地の奥に足を向けた。すると歩き始めたオレを追って、彼女が後ろからついてくる。ぱたぱたと、オレよりもテンポの速い足音が聞こえた。そうか、歩幅を合わせないと。

「あ……あのあの、今さらなんですけど、お名前を聞いてもいいですかっ？」

さり気なく速度を落としたオレの横にならび、こちらの顔をのぞき込むようにしながらアンドロイドの少女が尋ねてきた。

「えーと、沢渡だよ。沢渡、夏樹。よろしく」

「ナツキさん、ですね。覚えました。わたしは」

「知ってる。初音ミクだろ。アイドルで、アンドロイドの。知らないやつのほうが珍しいんじゃないか？」

言葉の途中でオレがそう言うと、彼女は「むぐ」と口を閉じる。

「そうですかー、知ってるんですかー……」

自己紹介を先回りされて、彼女はちょっと残念そうである。黙って聞いたほうがよかったかな？ 彼女のしょんぼりした顔を見ていると、なんだか罪悪感が……話題、話題を変えよう。

「あー、それでさ、オレはなんて呼べばいい？ ……初音さん、と

か？」

「んと、事務所のみんなはミクって呼びますよ」

その答えを聞いてオレは言葉に詰まった。個人的に、初対面の相手を名前で呼ぶことには少々抵抗がある。だって、なんだか照れくさいじゃないか。

だけど、相手はアンドロイドなんだよな。あまり意識しすぎるのもおかしい気がする。人間ではなく無機物なのだから、たとえばそう家電みたいなもの、と思えばどうだろう？ テレビに向かって「テレビさん」はありえないわけで、そう考えると、ミクと呼び捨てにするのが正しいのかも……

ごちゃごちゃと悩みながら、横目で彼女の横顔を眺める。オレの視線に気づいた彼女は、形のいい眉を寄せて不思議そうに首を傾げた。

「?? あのこと……なぜだか、とても納得できない雰囲気を感じるんですが。こう、不当な扱いを受けているかのような……」

「気のせいじゃないか？」

無機物に心を読まれるなんて、どれだけわかりやすいんだ、オレは。それはともかく……さすがに家電扱いは無理があったか。本人もお気に召さないみたいだからやめておこう。アンドロイドなりに、数万円の安物と一緒にされたくないとか、そういうプライドがあったりするんだらう、たぶん。

オレはそこで自分の思考があらぬ方向に飛びかかっていることに気づ

き、こほんと咳払いをひとつ。

「ええと、ようするに……オレもミク、って呼んでいいの？」

「はい、それでかまいません」

彼女はにっこり微笑んで頷いた。さすがアイドルなだけあって、その笑顔はとても可愛らしい。”そういうふうには作られている”のだと、頭では理解しているが　クリスマスも近いこの時期、ロボ相手にどきどきしている自分がなんとも寂しすぎる。

自己紹介が終わってしまおうと話すことがなくなり、オレたちは互いの様子を気にしながら黙々と路地を歩いた。大通りから聞こえてくる遠い喧騒が、二人の間にある沈黙を容赦なく浮き彫りにする。なにか話そうと思っても、いい話題が見つからない。

実のところ、話題なら一つだけ心当たりがあるのだ。……なぜ彼女はここににいるのか？　その疑問は解決されないまま、まだオレの中に残っている。

しかし、どうしても口に出すことができなかった。

彼女はアンドロイドだから、人間の不利益になる行動は厳しく制限されているはずで、人間であるオレが「話せ」と命令すれば　いや、少々強気に尋ねるだけでも、きつと理由を話してくれるに違いない。機密など一部の例外を除き、彼女はおそらく黙っていることも嘘をつくこともできないだろう。

そこにつけ込んで理由を聞き出すのは、すごく卑怯であるような気がする。だからオレは言葉を飲み込んで、他の話題はないものかと

頭を悩ませながら、彼女の隣をただ歩いている。

出会ったばかりの彼女となんの会話もなく一緒にいるのは、当然のことながら激しく気まずい。せめて普通の女の子が相手なら今よりは多少余裕もあつたのだからけど、アンドロイドでありアイドルでもある初音ミクは、普通でないことにかけては世界でも屈指の存在である。隣を歩いているだけで精一杯だった。

そつだよな、落ち着けるわけがないよな。だって”あの”初音ミクと一緒にいるんだもんなあ　今さらになつて非日常的な現状を自覚してしまい、オレはいきなり不安になつた。

<ボーカロイド>初音ミクは、技術的な観点からするとまさに日本の至宝である。その特殊な”生い立ち”のおかげもあり、アイドルとしての人気だつて凄まじい。そんな彼女を、オレみたいな普通の学生がホイホイ連れて歩いて大丈夫なんだろうか？

今頃きつと、ミクの関係者たちは、突然いなくなつた彼女を必死で探しているに違いない。こんなふうには彼女と歩いているところを見つかれば、とてつもなく面倒なことになりそうだ。たとえば誘拐だと思われて大騒ぎになったりとか……法的には窃盗なのかな？　なににせよ、ただではすまない気がする。事情聴取と厳重注意くらいは十分ありえそうである。

このまま誰にも見つからずにすめば一番いいのだけれど、そんな期待はするだけ無駄だろう。機密の集合体であるミクには防犯対策の機能も色々と盛り込まれているはずで、見つかるのは時間の問題だと思つのだが。

そのわりに、ミクはさつきからずいぶん平然としている。いや、帰

りたくないと言っくらいだから平然としているのは表向きだけかも知れないが、少なくとも、いつ見つかるかと怯えている様子はなかった。

どうにも腑に落ちない。ずっと黙っているのも辛いので、オレはそのあたりを聞いてみることにする。

「なあ、さっき帰りたくないって言ってたけどさ、こんなふう逃げたってすぐに連れ戻されるんじゃないのか？ 発信機とかGPSとか、そういうのついてるだろ？」

すると、ミクはひかえめな胸をひかえめに張った。

「えへへ、大丈夫ですよ。GPS受信機の機能はちゃんとオフにしてありますから」

お、やっぱりGPSがついてるんだ いや、そんなことよりも。

彼女自身の意思でGPSをオフにできるのは、なんだか変じゃないか？ 現在進行形で逃亡に協力しているオレが言うのもなんだけど、こんなふう逃げられたら、周囲の人間はたまったものじゃない。彼女の開発にはヘタをすると兆単位の金がつぎ込まれているわけで、しかもアイドル活動による収益だってもの凄いはずだ。もし彼女になにかあったら天文学的な大損害である。ちょっと可哀想そうだが、二十四時間絶えず監視するのが普通だろうに。

そこで、オレはあることを思い出した。

「ああ、そういえば……プロジェクト成果の発表後にクレームがあったとかで……」

「わあ、よくご存知ですねえ。そんなですよ。限定的ではありませんが、わたしにも人権は認められています。だから、GPS受信機の操作権限もちゃんと与えられているんです。もちろん緊急時には強制的にオンになりますけど」

プロジェクト成果の公式発表直後、「彼女を人間として扱うべきだ」という意見が、個人や団体を問わず各所から殺到したのだ。きつと記者会見の場に姿を見せた<ボーカロイド>が、あまりに精巧だったせいだろう。しかも、そのことは各メディアで大々的に報じられて、けっこうな騒ぎになってしまった。ちょうど選挙を目前にひかえていた当時の政権は、そういった世論に大きな理解を示して結果的に、アンドロイドである彼女にも人権の一部が認められたのである。確か日本国籍も持っているはず。

ようするに、彼女のプライバシーは法によって守られている。位置情報などのモニタリングを拒否する権利だって当然あるわけだ。そういうことなら、しばらくは見つからずにすむかも知れない。……まあ、それでも見つかったらまずいのは変わらないんだけど。

「あつ、心配しないでくださいね？ ナツキさんは、わたしに付き合ってくれているだけで悪くないですから。わたし、ちゃんと証言しますので！」

どうやらオレがなにを考えていたのか察したらしく、ミクは真剣な表情でそう言ってくれた。ありがたいことではある、のだけど……うーん、ロボの証言って法的にどのくらい有効なのかなあ。

「あれ？ なんて疑うような目をしてるんですか？ ホントですってば。わたし嘘なんかつかないですよ」

「いやいや、疑ってないから。気のせいだから」

少なくとも疑ってるのはそこじゃない。まあ、とりあえず防犯カメラと同じくらいには有効だと思っておくことにしよう。どうせなるようにしかならないのだし。

オレは結局、彼女を見捨てるという選択肢が考慮から抜けていることにも、さっきからずっと”ナツキ”と呼ばれていることにも気づかないまま、考えるのをやめた。そもそもオレは頼まれもしないのにどうして彼女についてきたんだろうとか、そんな疑問は思い浮かびもしなかった。

そんな調子で、ぎこちないながらも言葉を交わしたおかげか、ミクはだんだんオレと話すことに慣れてきたようだった。弾むような足取りで隣を歩きながら、今度は彼女から話しかけてくる。

「ところで、ナツキさんってわたしのことにお詳しいですよ。あのお、わたしからこういいうことをお尋ねするのもなんなのでですけど……ファンとか、そういう感じでいらっしやいますでしょうか？」

「いや、違うけど」

「……そうですかー、違うんですかー……ちょっと寂しいですー」

ああ、がっかりしてる。言葉が足りなかったか。

「なんか面白そうだったから、前に色々調べたことがあるんだよ。なんたって世界初のアンドロイドだしさ。そういう意味じゃ、ファンってことになるかも」

そうつけ加えると、ミクは沈んだ表情をほわりと柔らかくした。密かにオレもほっとする。

「なるほどー、つまりナツキさんは技術的興味をお持ちに……あの、だからってわたしを分解したりとか、しないですよね？」

「するかっ!!」

「あつっ」

ミクが余計なことを言うものだから、彼女のCDを何枚か持っていることは伝えそびれてしまった。歌だっけっこう好きだぞ。

ちようどそんなことを話している最中に、ようやく路地の終りと公園の入り口が見えてきた。大通りを使わなかったぶん、だいぶ遠回りになってしまったけれど、ミクは気にしていないようだからオレも気にする必要はないだろう。できるだけ人の目を避けるとなると、この路地を使うしかなかったわけだし。

オレたちは周囲を確認しながら公園に入ると、敷地の奥に向かった。急いだりはせず、目立たないようにゆっくりと遊歩道を歩いていく。

その途中、飲料メーカーの自動販売機を見つけたので、温かい飲み物を買うことにした。この寒い時期、屋外で過ごすには身体を温めるものが欠かせない。

オレは迷わずに、いつも飲んでいる銘柄の缶コーヒーを選んだ。そして取り出し口から缶を拾い上げると、その熱で冷えた手を温めながら、後ろで大人しく待っていたミクに声をかける。

「なあ、ミクもなんか飲む……ああ、ごめん。無理だよな」

つつい余計なことを言ってしまった、オレは自分の迂闊さを悔やんだ。彼女があまりに人間らしいので、気を抜くと配慮を忘れて

「いえいえ、飲み物ならいけますよー」

「嘘っ！ いけんのっ!？」

「はい。わたしには、データ取りのために<ハイブリッド・コ・ジエネレータ>の試作機も搭載されていますから。少量であれば有機物の摂取はむしろ推奨されています。飲み物でしたらバッチリです」

ハイブリッド？ 余剰エネルギーを再利用するだけじゃなく、摂取した有機物からもエネルギーを回収できるってことか？ 基本動力は新素材を使った結晶電池かなにかだったと思うけど、それだけでは十分な稼働時間が得られないのかも知れない。

彼女の身体はこんなに小さいのに、ずいぶんと色々なものが搭載されているみたいだ。それでいて体重というか総重量は42キロ程度だというから驚きである。<コ・ジエネレータ>が中に入っているなんて、とても思えないのだが……うーん、どのあたりにあるんだろう？

「な、なんですかっ？ いきなり舐め回すように見たりして……」

オレは無意識に、ミクの身体をじろじろと眺めてしまっていたらしい。彼女が恥ずかしそうに身を引いたところで、やっと我に返った。

「あー、ごめん。＜コ・ジェネレータ＞はどこに入ってるのかなーとか思ってた。ほら、けっこう細身だからわからなくて」

「あううっ……やっぱり細いですかー、ですよー」

スタイルのよさをほめたつもりだったのに、なぜだかミクはしょんぼりとうつむいた。理由に心当たりのないオレが首を傾げると、さらにもじもじと身体を擦り始め……おいおいおい！ オレそんなに恥ずかしいこと言ったか！？ なんかそういう微妙なところに触れる話題だったのか！？

この時、オレはよほど困った顔をしていたのだろう。おかげでミクは事情を話すつもりになったらしく、やがて恥ずかしそうにしながらも口を開いた。

「あのお、実はですね、＜コ・ジェネレータ＞のメインモジュールは、その、胸のあたりに搭載されていまして……小型化が間に合わなければ、わたし、もうちょっとグラマーになるはずだったそうなんです……」

「え？ ああ、そういうこと……」

女の子には、細ければ細いなりの悩みがあるらしかった。彼女の場合、アンドロイドだけに成長は期待できないので、あとは設計変更に望みを託すしかない。そう考えると、ちょっとだけ哀れな気がする。

「初期の図面とかを見ると、胸のサイズがもう桁違いなんですよ……ぼーんってなって、きゅーってなって……いっそ開発が遅れてくれたらよかったですかー」

胸のために開発を遅らせてどうする。それに、もし大型のままだったら胸が大きくなるかわりに体重が増えてたと思うぞ。そのあたり、ちゃんとわかってるのか？

オレは、まだぶつぶつと唸っているミクを横目に深いため息をつきながら、もう一度、自動販売機の投入口に小銭を入れた。まあ、少女らしい身体の悩みはともかく、飲み食いは問題なくできるみたいだし。それなら彼女のぶんもなにか買わないと。

飲み物を選ぶように言うと、彼女は「そんなのですねー」なんて言いながら、ふるふるすると首を振って遠慮したが、この寒空の下、オレ一人だけが温かいものを飲むのはあまりに居心地悪いので、最後には、なんだかんだと理由をつけて強引に選ばせた。散々躊躇ってから彼女が選んだのは、小さなペットボトルのホットレモンだった。

それぞれ温かい飲み物を手にしたオレたちは、ふたたび公園の遊歩道を歩き始める。

広い公園の敷地は、どこも人の姿が乏しくて閑散としていた。ここ数日ですいぶん冷え込んだから、そのせいだろう。植えられている木々たちもすっかり冬支度を終えてしまっていて、枝にはもはや枯れた葉がわずかに取り残されているだけだ。冬をそのまま映しているかのような、見ているだけで寒くなる風景だった。そういう場所だからこそ、ミクのことであまり気を使わずにすむのだし、寒かろうが殺風景だろうが文句はないけど。むしろ人が少なくて本当によかった。

それでもわずかながら人影はあるので、手近なベンチに腰を降ろすわけにはいかない。オレは噴水のあるところから遊歩道を外れて、

舗装されていない林の中にミクを案内した。彼女はちょっとだけ不安そうだったが、驚かせたかったのだなにも説明せず先に進んでいく。

そうやって林の中をしばらく歩くと、木々にさえぎられていた視界がいきなり開けて 夕日をきらきらと反射する大きな池が、私たちの目の前に広がった。

「わあ、すごい……」

ミクの口から漏れた感嘆の声を聞いて、オレは胸を撫で下ろす。なにも喜ばせるために連れてきたわけではないが、喜んでくれるに越したことはない。

公園のちょうど中心にあるこの池は、まわりに遊歩道やベンチがきちんと整備されているし、もちろん眺めも綺麗なので、なかなかいい場所である。欠点があるとすれば、他のところに比べて人の数が多いことだ。実際、この寒い時期でさえ、カップルや学生のグループがちらほらとベンチに座っている。ようするに、あまり落ち着ける環境ではないのだった。本来なら、有名人であるミクを連れていては近寄ることもできない。

しかし、オレたちが今いる場所は、遊歩道から外れているおかげで静かなものだ。西に向かって開けているから、この時間だと景色も一番いい。なにより、木々が遊歩道からの目をさえぎってくれるので、ここならオレたちの姿は誰にも見えないはず。知られざる名スポット、というところか。

そう説明してやると、ミクは不思議そうに目を瞬かせながら、ちょっと首を傾げた。

「知られざる名スポット……あれ？　だったらナツキさんはどうしてこの場所を知ってるんですか？」

無邪気に急所を突かれてしまった。

真実を明かせば　以前、いつか彼女ができた時のために、なんて恥ずかしいことをふと思いつき、雰囲気の良い場所を色々と探したのである。ここはその成果の一つだ。そんな理由、口が裂けても言いたくない。

「……たまたま、かな」

「へえ、そうなんですかー。ナツキさんって、とてもラッキーなんですね」

素直な彼女の言葉がちくちくと痛かった。痛すぎてそろそろ泣きそうだ。この話はさっさと終わらないと。

「そんなことよりちょっと座ろう。あ、直接が嫌だったら下になんか敷くか？　ハンカチしかないけど」

「いえ、芝生ですから大丈夫です。よいしょ、っと」

ミクはにっこり笑って答えると、手近なところに勢いよく腰を降ろし　あーもう、パンツ見えてるしっ！！　スカートなんだから少しは注意してくれよ。気にならないほど興味が薄くはないし、喜んで観察するほど神経が図太くもないのだ、オレは。

とりあえず視線を微妙にずらしながら、オレはミクのすぐ隣に座っ

た。スカートの中身ができるだけ見えないようにと考えた結果、彼女にずいぶん近くなってしまった気がする。そのせいか、ミクが恥ずかしそうな表情でちらちらとオレのことは見てくるけれど、そんな目をされてもオレとしては無視するしかない。距離を空けると、お互いにもっと恥ずかしい思いをする。

やがてミクは気恥ずかしさに耐えられなくなったらしい。声にくつと勢いをつけて、少々強引に話かけてくる。

「あのあのっ、ここならフードを脱いでも大丈夫でしょうか？」

「ん？ ああ、大丈夫なんじゃないか？」

軽く頷いてやると、ミクは髪が地面に落ちないように手をそえながら、さっとフードを取り去った。解放された鮮やかな緑色の髪が、夕日を受けて煌きながらふわりと広がっていく。

その光景は一瞬でオレの視線を奪い、まるで幻想世界に迷い込んだかのような淡い錯覚を覚えさせた。現実感の希薄な美しさから目が離せない。なにも考えられず、黄昏の空気に意識が溶けてしまっいそうになる。

ミクは長い髪をまとめて太股の上に乗せると、そこでオレが呆然と見ていることに気づき、目だけでどうしたのかと尋ねてくる。

「？」

「……なんでもないよ」

我に返ったオレは不甲斐なく首を振って、誤魔化すように持ってい

た缶コーヒーを開けた。するとミクも同じようにホットレモンのペ
ットボトルを手にする。

まあ、そこまではよかったのだが。

「ん、ぐぐ……ナツキさん、あの、これ開かないんですけどー」

「……貸してみ」

そういうちょっとした紆余曲折の後に、二人そろって飲み物を口に
した。コーヒーの苦味と温かさが広がっていくのを感じつつ、オレ
は横目でミクの様子を確認する。 おお、本当に飲んでるよ。す
げえ。

ミクは小さな両手で口もとのペットボトルを支えて、「んく、んく」
とホットレモンを飲み込んでいた。まるで子供みたいな飲みっぷり
だけど、人間とは内部構造が多少違っただろうから、どうしてもそ
ういふふうになってしまう、のかな。

「ホットレモン、好きなのか？」

ふとそんなことが気になってしまい、前置きもせずに尋ねてみた。

「ぶはっ　んー、どうでしょうか。味の違いは解析できますし、
その情報から”不味くはない”んだらうなって思いますけど……好
き、っていうのはちょっと違うかも知れないです。今のところ飲
み物は全部そういう感じですねー。あ、もちろん苦すぎたり辛すぎ
たりすれば、うえーってなりますよ？」

最新技術でもそのあたりが限界なのか。人間の味覚は再現が難しい

のだと、本で読んだことがある。

「なるほどね。だったら食べ物とかも一緒なの？」

「！！はいはいっ、ネギが好きですっ！ネギっ！」

「うわ、即答……………ねぎっ？」

ミクの過敏すぎる反応に心の距離をちょっと離したりしながら、オレはじっと考える。ねぎ……………そんな料理、この世にあつたらうか。響きから想像するに韓国あたりの郷土的な

「そうです、ネギです。キュートな長ネギ。もう大好きです」

薄々わかつてはいたが、やっぱりただの長ネギだった。ミクには悪いけどキュートさが理解できない。だってネギだし。

彼女の口振りからすると、どうやらネギを使った料理が好きとかではなく、ネギそのものが好きみたいだ。好きな食べ物を聞かれてネギと答えるやつに会ったのは、これが初めてのことである。反応に困ったからといってオレが未熟なわけではない、はずだと思っけど……………どうなんだろう？

「苦味と甘味と辛味の混ざり合った、あの複雑な味わいが、わたしの<VN・OS>を激しく刺激するんですよ。なんて言うんですよう……………ビビッとくる？」

そうか……………ビビッとくるのか……………まあ、そういうのが彼女なりの”美味しい”なのかもなあ。

というか

「えへ、ネギっていいですよねえ」

ああ、ミクがすっかり締めりのない顔に……アイドルなんだから、人前でそういう顔するのはやめなさい。

ネギの世界に旅立ったミクの横で、オレは今日何度目かの大きなため息をついた。彼女に抱いていたイメージはもはや完膚なきまでに粉々で、少しも原型を留めていない。なんともまあ、脳天気なアンドロイドである。

……いや、脳天気でもないのか。帰りたくない理由、あるんだもんな。

突然、ミクと出会った時のことが頭に浮かんだ。細い路地の入り口で偶然ぶつかったのが始まり。吹っ飛ばされたのは自分のくせに、彼女は「前方不注意だった」なんてオレに謝ったのだ。

しかし、冷静に考えると、ただの前方不注意で吹っ飛ばほどの勢いがつくとは思えない。

もしかしたら、あの時、彼女は走っていたのではないか？ 追われているわけでもないのに、まるで逃げるように。

だとするなら、彼女がどれほど思いつめていたのかも簡単に想像で

きる。きつと”帰りたくない理由”から少しでも遠くに逃げたくて、どうしても走らずにはいられなくて　オレとぶつかったのは、ちようどそんな時だったのかも知れない。

そして彼女はすぐるような声で、見ず知らずのオレに言ったのだ。帰りたくない、と。

全部、オレの勝手な推測にすぎない。だからこそ知りたい。どうしても彼女は帰りたくないのだろうか？　彼女はなにかから逃げてきたのだろうか？　オレは、それを知りたいのだ。

考えれば考えるほど、気持ちを抑えられなくなっていく。自分でも不思議なくらいに。

「　なあ、そろそろ聞かせてくれないか？　帰りたくない理由ってやつ」

気がつけば、彼女にそう尋ねていた。

「あ……」

ミクはため息のような声を漏らすと、視線を地面に落とした。一瞬で表情から明るさが消え失せ、そのかわりに、じわりと憂いが浮かぶ。

唇をきゅっと結んで黙り込んだ彼女を、オレはただ待つことにした。自分が言ったことの意味くらいはちゃんとわかっていたから、そうする以外にはなにも思いつかなかった。

しばらく待つと、彼女は地面を見つめたまま小さく口を開いた。

「……どうしても、言わなきゃダメですか？」

「いや、話したくなかったらいいんだ。命令とかじゃないから。ただオレが聞きたいってだけ」

オレは、単なる下世話な興味で彼女を暴こうとしているのではないか？ その可能性を否定できないから、無理には聞きたくないと思つた。それは間違いなくオレの本心である。

けれど、知りたがっている気持ちもまた否定できないほどに強いのだ。

ようするに、ものわがりのいいことが言えたのは、素直な彼女はきつと話してくれるだろうなんて、心のどこかで確信していたからにすぎない。

そして、その確信は間違っていなかった。

「ナツキさんは……わたしの歌をお聴きになったこと、ありがとうございます？」

唐突すぎる問いかけ。口にした彼女の表情は、尋ねるのを怖がっているようにも見えた。

「聞いたことあるよ。さっきは言いそびれたけど、実はCDだって持つてる。しかもデビュー曲は初回限定のやつ」

ミクが少しでも話しやすくなるように軽い調子で答えると、彼女は薄っすら微笑んでこちらを向き、「ありがとうございます」と言っ

た。その小さな声は、CDを買ったことに対する感謝にも聞こえだし、オレのわかりやすい気づかいに対する感謝にも聞こえたが……どちらかはわからない。

それからミクはしばし考え込んでいた。どうやら言葉を探していたらしいが結果は思わしくなかったようで、ふたたび口を開いた時の様子はどこかたどどしかった。

「あの、ですね……わたしの歌を聴いて、どうでした？」

「うん？ いや、どうって言われても……」

オレは返答に困って、思わず言葉を濁した。それなりに歌は聴くし、曲や歌詞の好みだつてある。でも、歌のここがいいとか悪いとか、そういうことを言えるほどの知識やセンスは持ち合わせていないのだ。

しかし、そんな言い訳で逃げるわけにはいかない。彼女は真剣に話してくれているのだから、オレも精一杯に応えなければ。とは思ったのだが。

「……まあ、少なくともオレよりは上手いよな。それは間違いないけど」

悩んだ挙句、頭が悪そうな答えしか思いつかなかった。黙っていたほうがまだよかったかも知れないとすぐに後悔する。

案の定、ミクはきよとんと目を丸くした。

「ナツキさんは、あまりお上手じゃないんですか？」

「上手くないというか絶望的というか……音程が合ったことない」
なんとなく慚然とした口調になって、ぼそりと答えた。ファーストフード店の前で友人たちのカラオケの誘いを断ったのは、そういう事情があったからだ。

普通なら、あの状況で用事もないのに誘いを断りはしないだろう。けれど、オレは音感のない人間なのでカラオケがあまり好きではない。だからあつさりと断ったのである。……そうなるかわかっているのに、友人たちは毎回、一応オレにも声をかけてくれる。ありがたいような、ありがたいくないような。

「あもう、そういう人と比べられてもあまり参考には……」

口を滑らせて自分の欠点を明かしてしまったオレに、ミクがちよつと困った顔でもっともなことを言った。

「……なんだよ、一応ほめたつもりだったのに」

拗ねた口調で言い返すと、その反応を待っていたかのように彼女はくすくすと笑い声をこぼした。もちろん本当に拗ねていたわけではないから、オレも一緒に笑った。

そんなふうには笑い合えたおかげで、ミクの中にわだかまっていた迷いは少しだけ晴れてくれたようだった。先ほどまでよりもいくらかすっきりとした声で、彼女は話を続ける。

「わたし、今度また新曲を出すんです」

だから自分の歌をどう思うかなんて聞いてきたのだろうか　そう考えたけれど、話の腰を折らないようにと口には出さない。

「へえ……どんな曲なんだ？」

「バラードとまではいかないですけど、今まで歌ってきたものよりはスローテンポな曲ですね。……今度のクリスマスライブで、歌うことになっています」

そこで一旦、ミクは言葉を止めた。気持ちを落ち着けるためか、一度だけゆっくりと瞬きをする。そんな彼女の様子に、たぶんここからが本題なのだと感じた。

「その曲を作ったプロデューサーさんって、とても有名な人なんです。お名前は　」

ミクが口にしたのは、オレでも知っているほどの名前だった。もともとはロックバンドの男性ギタリストで、数年前、バンドが解散したのをきっかけに、音楽プロデューサーに転向した人物である。所属していたバンドはそれほど売れていなかったはずだが、どうやらプロデューサーとしての才能はあったようで、彼が関わった曲は今のところすべてが大ヒットしている。その結果、たった数年でマスコミから天才と呼ばれるまでになった。

彼がアイドル歌手に曲を提供するのは、初めてのことなんじゃないだろうか。それだけでも話題性はある。しかも、歌うのは世界初のアンドロイドシンガー初音ミクなのだ。もちろん曲の出来にもよるが、ミリオンセラーだって夢じゃない組み合わせだ。　だからオレは、とてもいい話じゃないかと素直に思ったんだ。

「ホントかよ……絶対に売れるぞ、それ」

しかし、ミクは弱々しく首を振ってオレの言葉を否定する。

「でも、だめなんです……このままじゃ、わたし、歌わせてもらえない、から……」

「は？ 歌わせてもらえないって……どういうこと？」

曲があり歌手がいるなら、あとは歌うだけのはずだ。素人のオレにはそう思える。なのに、どうしてそんなことになるのか。

「プロデューサーさんに、歌詞を覚えるだけじゃダメだって、もっと気持ちを込めなさいって……そう、言われちゃったんです。それができないなら……この話は、なかったことに、してもらって」

その瞬間、オレは言葉を失った。

ずいぶん前に、情報雑誌の特集で読んだ覚えがある。天才プロデューサーである彼は、どうやらかなり気難しいらしいのだ。その雑誌に載っていたのは、天才にありがちな頑固さを面白おかしく紹介する記事だったから、オレは、それに振り回されるやつと同じ気持ちなんて考えもせず、ただ笑うだけだったけれど

「社長が頑張ってお話をまとめて、事務所のみんなからも期待されてるのに……わたし、どうしよう……わたし歌えなかったら、どうしよう……」

たぶんオレはもう二度と、ああいう記事を読んでも笑えないだろう。そう思った。

プロデューサーの立場からすれば、当然の主張なのだ。自分の作った曲を一番いい形で歌ってもらいたいだけ。もしかしたら、そうやって妥協せずにやってきたからこそ、彼は成功できたのかも知れない。

だから彼のことを責めようとは思わなかった。それどころか音楽に対する姿勢には尊敬さえ感じる。だが、それでも　それでもだ。

「どうにかしなきゃって思うんです……でも、わからないんです。気持ちを込めるって、わたし、どうすればいいのか……」

まだ出会ったばかりの、オレなんかの前で、ミクがこんなにも辛そうにしている。その事実を許すことは、できそうになかった。

しかし、オレの冷静な部分は、プロデューサーの言葉がただのきっかけにすぎないことを、はっきりと理解していた。この憤りはオレの単なる我がままで、結局のところ彼女の苦しみは彼女の中にあるのだと、わかつている。わかつているからこそ、オレは息をひそめて彼女の次の言葉を待ち

「ナツキさん、わたしの”気持ち”は……ヒトに伝わるでしょうか？」

ここに至って、オレはようやく彼女の帰りたくない理由を思い知った。

「わたし、アンドロイドです。ヒトの真似をしているだけの、機械なんです。わたしの”気持ち”は、全部作り物なんです。……そんなわたしが歌に”気持ち”を込めたとして、それはヒトに伝わってくれるでしょうか？」

問われたことの重さに耐え切れず、オレはほとんど無意識に肺から空気を逃がす。言葉なんて返せるはずもなかった。

彼女を苦しめているのは、自分の”気持ち”そのものに対する疑問だったのだ。自分が歌に込めようとしているこの”気持ち”は、本当に”気持ち”と呼べるのかどうか。そんなふうに、彼女は自身を疑っている。

越えられない壁。絶対的な行き止まり。きっと、歌に気持ちを込めると言われて悩み抜いた結果、そこにたどり着いたのだろう。

自己の存在や意識に対する疑問は、アンドロイドの宿命とも言える猛毒だ。その毒がどんな苦しみをもたらすのかと想像するだけで、情けなく背筋が震えてしまう。

もしも、お前の”気持ち”は作り物だと誰かに言われたら、オレはどうなる？ まとも生きていけるか？ 彼女のように笑えるかわからない。だが、きっと苦しむはずだ。

アンドロイドは精巧になればなるほど自分の存在に疑問を抱き、苦悩することになる。よりもよってそんな苦しみを、生まれた時から背負わされている。アンドロイドの開発にまだ反対意見が多いのも、今なら理解できなくはなかった。

「実はずっと悩んでました。わたしが感じている作り物の”気持ち”は、ちゃんとヒトにも伝わるのかな、って。ですけど、ちっとも答えが出なくて……今でも、たくさんの思考処理がループに陥ったまま”不安”としてわたしの中に蓄積されています。それが今回のことでバーストしてしまったみたいで　だから、こんなふうに逃げてきちゃったんです。ダメなアンドロイドですよ、えへへ……」

すべてを聞き終えた時、オレは目眩がするほどの脱力感を覚えた。重い空気を誤魔化そうとするミクの弱々しい微笑みにも、まともに応えてやれない。

ただ彼女の心を暴いただけで、優しい言葉の一つさえ思い浮かばない。

「ごめん……無理矢理、辛いこと言わせて」

謝ったところで救えるのは自分だけだ。それがわかっているても謝らずにはいられなかった。

途端にミクは表情を明るくして、胸の前でぱたぱたと両手を揺らす。

「いえ、あの……わたし平気ですよっ！　悩みはありますけど、楽しいことだったたくさんあるんですから！　ええと　そうそう！　今ですね、わたしの妹と弟が開発中なんです。もう最終調整のフェーズに入っているそうなので、わたし、あとちょっとでお姉ちゃんになるんですよー。それがもう嬉しくて嬉しくて！」

そんな彼女の強がりを見無駄にはできず、オレは無理矢理に笑みを作った。

「ああ、そういえば先週あたりに、そんなニュースをちらっと見かけた気がする……なんて、名前だったっけ？」

「妹の名前はリン、弟の名前はレンっていいいます。えへへ、二人に会えるのが今から楽しみです」

どこか泣きそうにも見える顔で、ミクが笑っている。オレの顔にも彼女とそう変わらない表情が浮かんでいるはずだ。考えていることだって、たぶんお互いに似たようなもので……相手がどうしたら笑ってくれるかなんてことを、思っている。

ふと不思議になってしまった。オレたちのどこに違いがあるというのだろうか？

まったく同じだなんて空っぽの嘘を口にするつもりはない。いくら人間のようであっても彼女は確かに作り物だから、そこを否定すれば、結局は彼女自身を否定することになる。

けれど、彼女のすべてをただの作り物だと言い捨てる気にもなれないのだ。

彼女が見せてくれた様々な表情は、オレたち人間と少しも変わらなかった。辛いことから逃げたり、失敗して困ったり、苦しいのを誤魔化して笑ったり、それから　自分の”気持ち”がわからずに、悩んだり。

きっと人間だって、そんなふうに毎日を生きている。

自然と心に浮かんだその思いを逃さないように、オレは少しだけ目

を閉じた。ぼんやりして曖昧な欠片を集めて、ゆっくりと自分の言葉にしていく。そうしながら深呼吸をひとつ、ふたつ

ふたたび目を開けた時、夕日に照らされる公園の景色が、さっきよりもずつと綺麗に見えた。

「お姉ちゃんか……だったら妹たちに見せてやらないとな、お姉ちゃんのカツコイイところ」

「え？」

会話に間があつたせいか、ミクは戸惑いの表情を浮かべた。けれど、オレはかまわずに話を続ける。

「今度の新曲、バツチリ完璧に歌ってやれよ。でないと妹たちにバカにされるぞ、お姉ちゃん」

彼女の細い肩がびくりと震えた。

「でもっ　！　でも、わたしはまだ……わたしの”気持ち”が、わかりません。”気持ち”があるのかどうかも、わからないんです……」

ミクは一瞬だけ大きな声を上げかけたが　その声はすぐに小さくなり、あっさりと消える。

うつむいた彼女の姿に胸がずきりと痛んで、オレは思わず言葉の続きを飲み込んでしまいそうになった。しかし、こうなることは重々わかっていたのでどうにか堪える。

「……オレだつて似たようなもんだよ。”気持ち”って人間同士でも伝わったり伝わらなかつたりするし、だから、なにかあるとすぐ不安になって、ごちゃごちゃ悩んで自分のことを疑つて　そんなのしょっちゅうだ。そのたびに色々と考えるんだけど、自分の”気持ち”がはつきりわかつたことなんかまだ一度もない」

誰かのためにしたはずの行為ですら、その根もとにあるものを掘り返せば、時には、ただの自己満足だったり、臆病な偽善だったり、するものだから。

本物の”気持ち”はいつも深い深い霧の向こう側で、そこに答えを見出すのはとても難しい。あるいは一生、答えなど出ないのだろう。

だから手探りで進んでいくしかないのだ。ヒトもアンドロイドも。

「今もさ、不安でしょうがないんだ。……たとえば、オレがなんでこんな話をしてるのか、ミクにはわかるか？　オレの”気持ち”は伝わってるか？　もしかして、偉そうにわかつたようなことを言うな、なんて思つてないか？」

「えっ……そ、そんなこと思つてないです！！　あの、ナツキさんは、なんだか優しい、気が……します……！！」

わざわざ意地悪な言い方を選んだオレに、ミクは恥ずかしそうな顔であたふたと答えてくれた。穏やかな温かみが胸に広がり、くすぐったくなる。自然と頬が緩んでしまう。

「そっか、ならよかつた。正直、この”気持ち”が本物かどうかなんてわからないけど……それでもちゃんと伝わってくれた、ってことかな」

微笑みを向けながらオレがそう言うと、ミクは虚を突かれたように目を見開いた。

「え……」

「作り物の”気持ち”でも、こんなふうにさ、きっと誰かにわかってもらえるよ。だから、ミクはただ一生懸命に、自分の”気持ち”を込めて歌えばいいんじゃないか？」

ほんの短い時間だけれど彼女と接して、感じたことがある。

たとえ作り物だろうがなんだろうが、彼女は彼女のままがいい。怖がる必要なんてない。これこそが自分なのだと言胸を張って、”気持ち”を伝えればいい。オレは心からそう思うのだ。

長い会話のあとに残されたのは、お互いの沈黙だった。けれど、路地を歩いていたら時とは大違いで居心地の悪さはない。

徐々に色を濃くしていく夕日の赤と、肌を痺れさせる冷たい空気の中で、オレは静かに、言葉を失った彼女のことを見つめる。

しばしの間、ミクは呆然とした表情で凍りついていた。静寂の中、長い緑色の髪は風に流されるままで、瞳は瞬きもせずに時間を見送り やがて、わずかに唇を震わせる。

「あ、あ……ああ」

今度はオレが呆然とする番だった。彼女がなにかを言おうとしているのは明らかだったが、聞こえてくるのは吐息のような声だけで、まったく言葉になっていない。不安が胸の奥で大きく跳ねる。

「……………ミク？」

返事はなかった。それどころか顔をのぞき込んでも反応はなく、ミクはただぼんやりと前を向いている。

「お、おい！ 大丈夫なのか？ 答える、ミク！ 初音ミクっ
！」

「え……………あ、ナツキさん……………」

肩に手をかけ揺さぶると、彼女はぴくりと顔を動かし、ようやくオレの顔を瞳に映した。しかし、まだ様子がおかしい。

「ゴ、ごめんなさい……………いま、〈VN・OS〉の思考活性率が急激に上がって、あちこちで処理落ちを あ、ああ、色々なものが一度につながって、そのまま広がって……………」

雑然と不明確な言葉を呟きながら、彼女はゆっくり視線を彷徨わせた。そして西の空に沈んでいく真っ赤な夕日を見つけると、止める間もなく立ち上がる。

まるで誘われるかのようにミクが一步步池に近づいていく姿を、オレはぴくりとも動けずに目で追った。なにかもが夕焼け色に染まる世界で、池のほとりに立った彼女のまわりを水面の反射がきら

きらと跳ねる。その眩しさに思わず目を細めてしまう。

「なんて言えば、いいんでしょう……？ ループに陥って絡みあっていた思考処理が　そう、”胸にすんと落ちたみたい”に、収束していくんです。とても、素敵な気分なんです。嘘みたい……世界が、綺麗……」

空の彼方に向かってそう言うと、彼女は夢見るような新緑の瞳でオレのことを振り返った。

「ナツキさん……わたし、今すぐ歌いたい。わたしの歌、あなたに聴いて欲しい」

瞬間、どくと心臓が跳ねた。彼女の”気持ち”が直接響いたかのような錯覚に、頭がくらくらとする。

……錯覚？　これが錯覚なら、確かなものはどこにある？

いつの間にかオレは立ち上がった。頭の中は隅から隅まで真っ白で、身体感覚なんてどこにも残っていない。なのに、足は自然と彼女のもとに向かう。胸の奥が、早鐘を打つように高鳴っている。背後から声が響いたのは、その時だった。

「ストップ！　はい、そこまでねー」

はっと我に返って立ち止まり、急いで振り返ると、林の中にコート
を羽織ったスーツ姿の女が立っていた。女は眼鏡の奥にある半分眠
ったような目で、面白がるようにオレたちのことを眺めている。

まずいつ！

オレは反射的に、女の視線の前に身体を滑り込ませた。ミクを隠す
ためだったが、しかし、今さらオレが盾になったところで隠せる
ような状況ではないと、すぐに気がつく。

まいったな。どうにか誤魔化さないと……いつそのことコスプレだ
って言い張るか？

「ふうん、咄嗟に守ろうとするなんていい心がけだけど 無理に
隠さなくてもいいわよ。わたし関係者だから」

「え？」

「ふふっ。そうよね、ミク？」

女は気楽な調子でひらひら手を振ると、立ち塞がったオレの身体を
通り越すように声を投げた。

予想外のことには驚きながらも後ろを振り返り、ミクの様子を確かめ
ると、彼女は目をぱちくりさせながら、ぽかんと口を開いていた。

「宝田、さん……？ ええっ、どうしてここがわかったんですか！
？ GPSはちゃんとオフになってるのに！」

「あのねえ、GPSがなくてもいくらだって探せるの。フードをかぶった頭デツカチなんて、そりゃもう簡単なんだから」

「そ、そうなんですかー」

「ちなみに、あなた都市伝説になりかけてたわよ？ フード姿があまりに不気味すぎたんでしょうね。おかげで通行人の記憶に残ること残ってること……まったく、アイドルのくせして都市伝説にならないでちょうだい。事務所に迷惑でしょう」

「あつづ……ごめんなさいい……」

ほんの二言か三言で完全にやり込められてしまい、ミクがしょんぼりと縮こまる。悲しいくらい上下関係がはつきりとわかるやり取りだったが、なににせよ知り合いであることは間違いなさそうだ。オレは胸を撫で下ろすと、身体の緊張を解いた。

「やっとわかってくれたみたいね」

オレに向かってそう言いながら、女がよどみのない足取りで近づいてくる。安全だと確信するまでずっと気を張っていたオレは、そこでようやく彼女をまともに見ることができた。

年齢は二十代の後半といったところだろうか。身につけているのは就職活動中の学生みたいな、ほとんど飾り気のないスーツとコートである。どちらかと言えば化粧も地味なのだが……ずいぶんと派手に見えるのはなんでだ？ 不思議に思っただけでまじまじ観察すると、彼女はもの凄い美人なのだ。スタイルにも過剰なくらいめりはりがあつて、その全身から女性を主張している。まるでスーツに爆弾が詰まっているみたいだ。派手に見えるのは、きっとそのせいで違

いない。

「ふふ、邪魔しちゃってごめんなさい。　　というより、むしろ感謝して欲しいくらいかな？　まあ、道ならぬ恋がしたいなら話は別だけど」

オレの横を通り過ぎる時、女が余計な一言をこっそりと囁いた。なんのことだかさっぱりなので、オレはもちろん聞こえなかったふりをする。

幸いにも、アンドロイドの少女にはその囁きが聞こえなかったようだ。ミクは近くまでやってきた女の隣にならぶと、無邪気な顔でくるとオレに向き直った。

「ナツキさんナツキさんっ、この人はわたしのマネージャーで」

「宝田です。よろしく」

そう言いながらにこりと微笑んだ女に、オレは苦虫を噛み潰したような顔で会釈をする。

「宝田さん、こちらはサワタリナツキさんとおっしゃって……」

「大丈夫よ、事情はだいたいわかってるから。けっこつ前から盗み聞きしてたしね」

衝撃の事実を明かす宝田さん。

「盗っ……!!?　いつからですかあっ!?!?」

「あなたがフードを脱いだあたりから」

「それ、ほとんど全部ですー!!!」

ミクが両手を胸の前でぶんぶんと振り、泣きそうな顔で文句を言った。その気持ちはオレにもわかる……というか、めちゃくちゃ恥ずかしいんですけど。宝田さん、頼むから記憶を失ってくれ。

なんだか力が抜けてしまつて、オレはため息をつく。

しかし、気楽でいられたのはその時までだった。宝田さんは、子供みたいなミクの抗議を「はいはい」と言っていなすと、不意に真面目な顔をする。

「そんなことよりも……ミク、あなた自分がなにをしたのかちゃんとわかつてる？」

オレは二人の横で、ついにこの時がきたかと思った。

もちろんミクも覚悟はしていたらしい。彼女は一瞬だけびくりと肩をすくめたが、宝田さんの厳しい表情から目をそらしたりはしなかった。

「あなたがなにも言わずに姿を眩ませたりすると、色んな人が迷惑するのよ。わたしだけならいいけど、ヘタをすれば事務所ごと潰れちゃうの。あなたの場合、仕事が入ってなければいいって問題じゃないわ」

「……はい」

本当はミクを庇ってやりたくてしようがなかったけれど、オレはど
うにか言葉を抑えた。宝田さんの言っていることはもっともだった
し、そうでなくてもオレは口を出せる立場にいない。

「あなたには自分の好きにする権利がある。だから、まわりと上手
にやっていく義務もあるの。それはね、人間だろうがアンドロイド
だろうが同じよ」

「……はい」

「まあ、それができない時って誰にでもあるから今回はいいけど。
次からは、逃げる前に相談してくれると嬉しいかな」

「はい……え？」

宝田さんは話の途中で手のひらを返すように悪戯っぽく微笑み、戸
惑って目を白黒させるミクの鼻先を、ちよんと押した。

「とりあえず結果オーライってことにしましょう。ふふ、よかった
わね。悩みごと、解決したみたいじゃない」

「……はいっ！」

パツと表情を明るくするミクを見ながら、オレは心の底から安心す
る。大事にされてるみたいでよかった。こんな仲間がいるのなら、
彼女はきつと頑張っていけるだろう。

そんなことをぼんやり考えていると、宝田さんがいきなりこちらを
向いた。

「ねえ、ナツキくん」

「え あ、はいっ!?!」

「そんなに慌てなくてもいいわよ。今日はミクに付き合ってくれてありがとう。迷惑かけたでしょう?」

「……は?」

一瞬、本気で言われたことの意味がわからなかった。今日あった色々なことを思い浮かべてみても、やっぱり意味がわからない。

宝田さんの隣に目をやると、ミクが不安そうにオレのことを見ていた。……本当に面白いやつである。そんな顔する必要なんて、どこにもないのに。

「いえ、迷惑なんてことないです。オレは楽しかったから」

笑ってそう答えると、宝田さんは少しだけ驚いたようだった。

「あらま。こっそり盗み聞きしてた時にも思ったけど、ミクったらずいぶんイイコ引っかけたわね!。ふふん、初めてにしては上出来かなあ?」

「なっ………なんの話ですか? 宝田さんはいつもそうやって………」

わざとらしい口調でからかわれて、ミクが怒ったふりをする。しかし、彼女の顔はどうしようもなくにやけていて、はたから見ているオレまで嬉しくなった。

宝田さんに伝えたのは、オレの素直な気持ちだ。ミクと一緒にいた時間はとても楽しくて、迷惑だなんて少しも感じなかった。……本当のことを言えば、もっと一緒にいたい、なんて思っている。

けれど、いくら続きを望んだところで終りは必ずやってくるのだ。

「ごめんごめん。ミクたんが可愛すぎて、ついついイジワルしちゃうのよね。それはともかく、そろそろ帰りましょうか。さっきの気持ち、忘れないうちに歌わないといけないし。ちょっと無茶だけど社長のコネで今からスタジオを借りましょう」

「ええっ!？ あの、もうですか……?」

「ん、なに？ まだなにか用でもあるの?」

「あ……いえ、なんでもないです……」

ミクのささやかな抵抗は、あっさりと吹き散らされた。残念だが当然の結果だろう。初音ミクと沢渡夏樹では、あまりにも立ち位置が違いすぎる。いつまでも一緒にいられるはずがない。オレにできるのは、きつと彼女を見送ることだけだ。

「それじゃ、さようなら。できれば今日のごことは内緒にしておいてね、ナツキくん」

オレよりも大人だからか、それともただの性格なのか、宝田さんはあっさりと踵を返した。そのまま振り返りもせず、遊歩道に出るため林に向かって歩いていく。

取り残されたミクは、視線を宝田さんとオレの間でいつたりきたりさせていたが、やがて決心がついたらしく、ぺこりと頭を下げた。

「あの、今日は本当にお世話になりました。わたし、ナツキさんに会えてよかったです」

「ああ、うん……そっか」

我ながら情けない返事である。こういうところで頭の回らない自分が嫌いだ。

それからオレが何度か呼吸を終えるまで、ミクは黙って待っていた。たぶん気の利いた別れの言葉かなにかを待っていたのだろうと思うけれど、オレの頭はいらいらするほど役立たずで、なにも言ってもやれない。

「じゃあ……わたし、いきます」

最後にもう一度だけ頭を下げると、ミクは小走りに宝田さんを追いかけていった。どこか寂しそうにも見える小さな背中が、まだそれほど離れていなかった宝田さんの隣にならび、そのまま木々の間に消えていく。彼女の姿が、だんだん見えなくなっていく。

あまりにも、あっけなさすぎる終りだった。

もう彼女と関わることはないだろう。たぶん、これが最後の機会になる。

このままいかせていいのか？ 言い残したことはないか？ このまま見送って悔いはないか？

オレは強い焦りを覚えながら、凍りかけの頭で必死に考えた。

「なあ！」

結局、気の利いたセリフなんて思いつかなかったけれど、オレは彼女を大声で呼び止めた。

「……は、はいっ！」

まるで待ち望んでいたかのように、ミクがこちらを振り返った。表情がどうにかわかるくらいの距離から、期待に満ちた緑色の瞳でじっと見つめてくる。

「オレさ、新曲が出たら絶対にCD買っよ！ これからは番組とか雑誌も全部チエックする！ だから……！」

頭に浮かんだ言葉を思いつ切りぶちまける。恥ずかしさなんてちっとも感じない。こつすることが正しいのだと、身体中が叫んでいるみたいだった。

「だから頑張れよな！ オレのところにもちゃんと”気持ち”が届くように！」

オレがすべてを言い終えるのと同じ、ミクの顔に最高の笑顔が弾ける。

「はい、頑張りますっ！」

オレが、アンドロイドシンガー初音ミクのファンになったのは、この時だったのかも知れない。

なぜなら　夕日の中、大きく手を振りながら嬉しそうに笑った彼女は……まあ、その、なんだ。

忘れられないくらいに、可愛かったんだ。

鮮烈な出会いの後に残された十二月の日々は、驚くほどなにもなく驚くほどあっという間で……気がつけば、世の中は大晦日を迎えていた。しかも、すでに時刻は夜の十時をまわっている。そろそろ今年も終りだ。

一年最後の日、オレは自分の部屋で年越し蕎麦がわりのカップラーメンをすすりながら、テレビの真正面に陣取っていた。視線も耳もテレビに釘付けのまま、熱い麵をはふはふと口に運んでいく。

十五インチの小さな画面に映っているのは、初音ミクのステージだった。生放送中の年末番組で、今まさに、アンドロイドの少女が澄んだ歌声を響かせている。

彼女が歌っているのは、もちろん　クリスマスライブで発表されただばかりの新曲、〈ピア・トゥ・ピュア〉である。

あの後、ミクは無事に例のプロデューサーを納得させることができたらしく、新曲の発表は予定通りに進んだのだった。ミクの不調による遅れを取り戻すために、関係者全員、相当無茶なスケジュールを強いられたはずだが……まあ、結果を考えれば、その甲斐は十分にあつたと言えるだろう。

<ピア・トゥ・ピュア>は、初披露となったクリスマスライブを皮切りにテレビやラジオからも幾度となく流れて、一気に世間の話題をさらった。ファンやマスコミの評価は大絶賛の一言につきなんと、気難しいことで有名なプロデューサーの彼も、音楽雑誌のインタビューに珍しく好意的なコメントを返している。コメントの内容を要約すると、「歌い手のおかげで、いい作品になった」とのことだった。そんな彼の発言がさらに大きな話題を生み、<ピア・トゥ・ピュア>の人気は、発表からたった一週間で社会現象になりつつある。年明けすぐの発売となるCDには早くも予約が殺到していて、すでにミリオンセラーが決定しているそうだ。

……こういう情報がすらすらと思い出せるあたり、我ながらずいぶんとミクのことについて詳しくなつたものである。きっと努力の賜物だろう。

オレは彼女との約束をちゃんと守っている。彼女と出会った証を、大切に大切に守っている。新曲はもちろん予約済みだ。それに、あの日から彼女が出演する番組は残らず録画しているし、彼女の記事が載った雑誌や新聞だつてすっかり買っている。最新情報を見逃さないようにと、公式サイトをチェックにも余念がない。そんなことをもう一週間以上続けているのだ。詳しくなるのも当前だった。あまりにも熱心にやりすぎたのか、同居している年下の従姉妹が最近まともに口をきいてくれなくなつてしまい、とても困っているのだ。

けど　ここのところ、あいつの口から「キモイ」以外の単語を聞いてない気がする　そちらは時間が解決してくれることを祈るばかりである。

テレビから聴こえてくるミクの歌が、やがてクライマックスに入っていく。オレは思わず箸を止め、アンドロイドの少女に見入った。

一生懸命に”気持ち”を込める彼女の姿はひっそりと儂くて、吸い込まれてしまいそうなほどに輝いている。まるで森の中にある小さな泉のようだった。その透き通った水鏡に、歌の波紋がそっと広がっていく。惹きつけられずには、いられない。

彼女の”気持ち”が向かう先には、誰がいるのだろうか？　透明な歌声の中に意識をゆだねながら、ぼんやりとそんなことを考える。

彼女を支える大切な存在が、きっとそこにいる。たとえば、もうすぐやってくるリンとレン、一緒に頑張っている事務所の仲間、応援してくれる大勢のファンたち　他にもたくさん。

その中に、オレの姿はあるだろうか？

こうして彼女のステージを観ていると、あの日のことがまるで夢だったかのように思えてしまう。実際、彼女との出会いはわずか一時間にも満たない邯鄲の夢だったから……もしかしたら彼女はもうオレのことなど覚えていないんじゃないか、なんて不安になってしまったのだ。こんなものは、たぶん感傷なんだろうけれど。考えたってどうにもならない、ただの感傷なんだろうけれど。

ふと我に返った時、すでに彼女の歌は終り、放置されたカップラーメンは完全に伸びきっていた。オレはため息をつきながら余計な考

えを頭から振り払った。

歌い終えたミクが笑顔でぺこりと頭を下げ、拍手をあびながらステージの脇に向かって歩いていく。すると、そこにはまるで記者会見場のようなセットが用意されていた。いや、記者会見場のような、というか、本当に記者会見が開かれるみたいだ。司会者の言葉によれば、〈ピア・トゥ・ピュア〉の大ヒットを受けた特別企画ということらしい。どうやら集められたのは新聞や雑誌の記者たちだけで、さすがに他局のテレビカメラは見当たらないが……なんでもありの年末番組とはいえ、テレビ局も思い切ったことをするものである。

すぐに記者たちの質問が始まり、ミクが次々とそれに答える。撮影も許可されているようで、時おりカメラフラッシュが瞬いた。

その光景に、先ほど振り払ったばかりの「遠いなあ」という感覚が性懲りもなくまた浮かんでくる。しばらくは、こういうことが続くのかも知れない。そうしながら彼女はオレの中でだんだんと思い出になっていくんだろう。

そういえば、こういう感じの古い恋愛映画があったっけ。あの映画もラストシーンは記者会見だったはずだ。オレたちの場合、あの映画ほどロマンチックにはいかなかったけれど、もし今回の出来事にタイトルをつけるなら……

あー、それはさすがに気取りすぎか。

オレは自分の思いつきに照れながら、恥ずかしさを誤魔化すために伸びきったラーメンをズルズルとすすった。もちろんその間もテレビの向こうでインタビュは続いている。

『 今回のシングルはなんと発売前にミリオンセラー決定となつたわけですが、その喜びを伝えたい方はいらつしゃいますか? 』

『 あ……はい、いますっ 』

『 そうですか! でしたら、そのお気持ちをカメラに向かって! いかがでしょう? 』

『 いいんですか? 本当に? わ、やった 』

無邪気に喜ぶ彼女の様子に、報道陣から柔らかい笑いが起こった。とても微笑ましい取材風景だった。

だが、なぜだろう? 彼女が嬉しそうにマイクを握った瞬間、オレはもの凄い悪寒を感じて箸を止め……

『 わたしの ” 気持ち ” 、ちゃんと届きましたか ナツキさん! 』

「 じぶめっ!?! 」

口に含んでいたものを残らず噴いた。

う……うおおおお! なにやってんだ、あのガラクタあっ! めちやめちや実名じゃねーか! ダメなんだよ、テレビでそういうことしちやダメなの! アイドルが生放送で男の名前とか呼んじゃダメなのっ! 事務所なにやってんだよ!? 歌よりもそういうの

教えとけよ！！

はい、台なし！ センチメンタル台なしっ！

『ナツキさん？ はは、ええと その方は女性ですか、それとも男性でしょうか？』

予定外の実名報道に多少戸惑いながらも、インタビューの流れを切るまいと別の記者が尋ねた。

ああ、そうか！ ナツキってだけじゃ男か女かわからないもんな！
うわあ、よかったあ。まさか女っぽい名前がこんなところで役に立つとは……

『え？ ああ、男性ですよ。……えへへ、優しくしてくれた人なんです』

報道陣のざわめきと無数のカメラフラッシュが重なった。

オレはあんぐりと口を開けて、その様子を呆然と眺める。絶望のあまり手から箸が滑り落ち、ぼろりと床に転がった。質問をぶつけた記者も、言葉を失ったまま思いつ切り目を丸くしている。たぶんミクが素直に答えるなんて露ほども考えず、ほとんど冗談のつもりで聞いたんだろっなあ……というか、もしかしたらミクの失言を冗談で誤魔化そうとしてくれたのかも。まあ、なにせよミクの反応は予想の斜め上をすっ飛んでいったわけだ。記者が絶句するのも無理

はない。

『んと、苗字はですね、沢わた　むー！？』

『お、おほほ！　ええーと、ミクはこの後に重要なメンテナンスをひかえておりますので、本日はこのくらいで……！』

ああ、ついに取り押さえられたか……もうだいぶ手遅れな気がするけど。

喋り続けようとするミクの口を間一髪でふさいだのは、マネージャーの宝田さんだった。あの日、あんなに冷静だった彼女がめっちゃくちゃに焦っている。その証拠になんか笑い方がおかしかったし。実在の人物が、おほほ、って笑ったよ。すげえ。

『ほおーら、ミクちゃん急いで帰りましょうねえ……！！』

『ふむう？　んー、んー！』

なぜ自分が口をふさがれているのかわからないようで、ミクは瞳をくりくりと動かしながら画面の外に引きずられていく。あー、あれはこっぴどく叱られるぞ………というか、ここまでやらかしたらリコールの対象になるんじゃないのか、あいつ。

ミクの姿が見えなくなると同時にカメラが切り替わり、番組の司会者が引きつった声音でCMに入ることを告げる。驚きすぎたせいかオレは妙に落ち着いた心持ちで、テレビに映った栄養ドリンクのCMを眺める。

大きな笑いの波が襲ってきたのは、栄養ドリンクのCMが終わった

のと同時だった。

「く……ははっ、はははは！」

なんだ、あいつは。面白すぎるぞ。アンドロイドのくせにあそこまでやらかすなんて想像もなかった。それともアンドロイドだからなのか？ 人間だったらずありえないもんな。うん、ありえない。

どうにも笑いが止まらなかった。ミクの突拍子もない行動が面白くて面白くて……

いや、この際だから誤魔化すのはやめよう。正直なところ 彼女がちゃんとオレを覚えていてくれて、嬉しかったのだ。ほわりと胸が温かくなつたような気がするのだ。ほんの少しだけ、彼女を思い出にするのはまだ早いかも知れない、なんて思えたのだ。だからオレは、隣の部屋にいた従姉妹が「うるさい！ 何時だと思ってるの！？」と怒鳴り込んでくるまでの間、ひたすら大声で笑い続けたのだ。

しかし、そんなふうに笑っていられたのは大晦日の一夜限りだった。年明け早々、ミクの発言が各メディアを大いに賑わすことになったからだ。話題の焦点はもちろん、「ナツキさんとは誰なのか？」である。そういつたニュースの数々にオレが青ざめたの言うまでもなく、しばらくの間はどうしても人の視線が気になってしまい、まるで逃亡犯のようにコソコソと生活するはめになった。幸せってやつは同じくらいの不幸と抱き合わせでやってくるものなのだろう。

ちなみに。

この出来事がきっかけとなり、翌年からオレは彼女にまつわる様々な騒動に巻き込まれていくのだが……それはまた別のお話である。

VOCALOID's Holiday...END

(後書き)

勢いあまって書いてみました。半分くらい冗談です。めっちゃめっちゃ季節外れのクリスマスネタですが、暇潰しくらいには……いかがでしたでしょうか？

あ、二次創作における著作権って難しいですね。

ひと言でもかまいませんので、ご感想などありましたらぜひ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2144e/>

ボーカロイドの休日

2010年12月3日06時08分発行